

国家資格取得に熱中した大学時代・・・思わぬ恩恵

森 均

前回（2017 年 12 月）紹介しましたように工業高専電気工学科卒業の私は、メーカーを退職し大学に進みましたが、失業体験が骨身にしみたせいか、国家資格の取得に力を注ぎました。国家資格は取得者しか従事できない仕事法律で定められていますので、一定の収入が得られます。

選んだ資格は電気主任技術者試験でした。約 100 年前に定められたこの資格があればビル・工場等の電気設備や変電所の設備管理の仕事に従事でき、また将来独立することも可能でしたので何がなんでもまずこの資格を取得し、失業してもすぐに再就職できる道を確保しようと考えました。

そこで大学の講義を終えると夜間の各種学校に週 3 日、4 か月間通いました。大学入学前に働いて貯めたお金を大学の授業料とこの各種学校につぎ込みました。この各種学校には、仕事を終えた 40 代から 60 代の人達が 40 人程入学しており、何とか国家資格を取得して収入額を高めようとか、今の仕事から脱出しようとか、それぞれ理由は違いましたが皆必死でした。いつも言われたことは「にいちちゃんみたいに、若いときに必死になって勉強しといたら良かった」、「世の中は思い通りにいかへんで」等々。休憩時間に夕食代わりのうどんをすすりながらいつも聞かされたものです。実際、年輩の方々は応用問題に苦労されていたので方程式の解き方など私が教えることもしばしばありました。しかし、一方で実務経験は豊かでいろいろなことを教わりました。

さて当時、第 2 種電気主任技術者試験は 6 科目各 2 時間の筆記試験に合格した者だけ、口頭試問に挑戦できました。試験は年に 1 回。ですから 1 年計画で取り組みます。筆記試験は 6 科目中 1 科目でも 100 点満点で 35 点以下があれば他の科目が高得点でも不合格で、最低でも 6 科目合わせて 360 点をとらないと合格できないと言われていたので、夜間の各種学校を修了してからも連日図書館に残り閉館まで勉強していました。おかげで 1 次試験に合格し、口頭試問に進みました。

口頭試問は、近畿地方の受験者が、午前の部・午後の部に分かれて集められました。私は午前の部でした。集合時間に会場（大阪府庁近くの合同庁舎）に行くとき徹底して情報漏洩対策がとられていまして、午前の部の受験者が全員集まるまで口頭試問は開始されませんし、終わっても午後の部の受験者が全員集まるまで一室に閉じこめられました。口頭試問は 2 カ所の部屋を巡る方法で、終わると別の部屋に待機を命じられました。集合した部

屋から口頭試問の2会場、そして口頭試問終了者が待機する部屋に着くまで係員がぴったりとついていて行動を監視されました。もちろん部屋のなかでも複数の係員に監視されていました。

口頭試問は2会場とも2問が示され1問を選択してから説明する形態で、私の説明が終わると質問が飛んできます。試験官は2名でとことん尋ねられました。技術的かつ専門的な内容ばかりでごまかしはできません。

そして、結果通知が届き無事合格。この年、合格者は全国で160名。合格率は数%でした。この国家資格を取得したことが後の人生を大きく変えていきます。学内奨学生に選ばれ学費は半額になり、大学院の入試成績はぼろぼろでしたがこの資格を取得していたことで拾ってもらえました。

教員に採用されてからも、いつクビになってもこの資格で食べていけるという思いで”後顧に憂いなく”思い切ったことができたと思います。孤独を恐れず、真に生徒のための学校に変えていくため知恵を出し続けて賛同者を増やし実践していく。その繰り返しがまた新たな道を拓くことにつながったと思います。

(森 均 特任教授/教員養成センター)
